

「宮の中将の君とは名のりたまふなりけり」考

——夜の寢覚における偽りの名のりの意義——

須藤 圭

一 はじめに

「いとみじく御命も絶ゆばかりおぼしためる御事を、かけても思ひ出でじと思ひはべれども、むげにきこえ知らせでは、いかでか。おはせし人は、この中納言にこそおはしけれ。但馬が女とおぼしおとして、『我をも知られじ』とおぼして、宮の中将の君とは名のりたまふなりけり。」

(五十七頁―五十八頁)^①

夜の寢覚は、天人から女主人公に対する宿世の予言というべきか、告白ともつぶやきとも捉えることのできるいくらかの言説から物語られている。天人は「これもさるべき昔の世の契りなり。これ弾きとどめたまひて、国王まで伝へたてまつりたまふばかり」(十八頁)と秘曲を伝え、翌年の来訪も予告して去るものの、「あはれ、あたら、人のいたくものを思ひ、心を乱したまふべき宿世のおはするかな」(二十頁)といい放ったまま、そののちに姿を見せない。女主人公は二年目と同様、三年目も天人の再来を待つけれども、そもそも、天人はその約束を交わしていたわけではない。ひとり待つばかりの女主人公は「天の原雲のかよひ路とちてけり月の都のひと問ひ来ず」(二十頁)と、閉じてしまった天上との回路をただ嘆くしかないのであった。

さて、天人によるこれらのことばに束縛されたまま、中でも後者の射程になるうが、女主人公は、物忌みで訪れた九条において、姉である大君の婚約者であった男主人公と契りを結ぶことになってしまふ。現存本の末尾が「夜の寢覚絶ゆる世なくとぞ。」(五四六頁)と締めくくられるように、九条での一夜をきっかけにして、途絶えることのない悲嘆が描きつづけられていくのである。

その九条の一夜、男主人公は、女主人公を但馬守三女と誤認して逢瀬を交わし、女主人公にも、次いで対応した対の君にも、自分じしんが宮の中将であると偽ってやり過ごしている。宮の中将であると虚偽の発言をしたのは、但馬守三女が宮の中将に心惹かれていたと事前に聞いていたことによる。そののち、宮の中将と語った人物が実は男主人公であったと対の君が見抜き、女主人公に語る場面が、いま、冒頭に掲げた一節である。対の君は「宮の中将の君とは名のりたまふなりけり。」といい、男主人公がたしかに偽りを名のりたのだと述べながら真相を解き明かしている。

あの人は宮の中将と名のりたのだ、という対の君の強烈なことばからは、偽りを名のりた男主人公に対する恨みとそれを信じてしまった対の君の悲痛な感情が透けてみえてくる。そしてまた、それにとどまらず、「名のり」という行為に対する男主人公と対の君、あるいは、女主人公との理解の差異、さらには、その差異の内側に、物語をかたちづくって

く女主人公の自己認識の問題さえも把握できるように思われる。「宮の中將の君とは名のりたまふなりけり。」ここから見えてくる夜の寢覺のありかたについて論じてみたい。

二 「声」を聞く対の君

女主人公に告白する以前、対の君が事実を知る場面をまずは見ておくことにしよう。

この対の君、宵の間などに参りつつ見るに、(男主人公ノ)ものうちのためへるけはひなどの、ただ見し夜の夢なるに、いとまたあさましく、「こは、いかなるさまぞ」とおぼゆれば、式部卿の宮の中將のけはひ聞き合はせまほしくなりて、(中略)この中將もつねよりもしげく参りて、宰相中將に付きてこの御方に馴れ寄り来るを、例はさしももてはやさぬを、若き人出だし会はせて、ものなど言はせて忍びて聞くに、このけはひ、いとあてやかに心にくけれど、似るべくもあらざりけり。

「なほこの中納言にこそものしたまひけれ」と、見聞き合はせつるに、(中略)「声聞かば、おほえたたまひなむ。知りだにそめたまひなば、男の御心は、今はいかがはせむと、よにおぼさじ。ものの聞こえ、いますこしわづらはしく、聞き苦しかるべし」と思へば、音なくて引き入りたまふ。

(五十五頁―五十七頁)

対の君は、男主人公の「ものうちのたまへるけはひなど」に、九条の一夜の人物ではないかと不審を抱いたことから、「式部卿の宮の中將のけ

「宮の中將の君とは名のりたまふなりけり」考

はひ聞き合はせまほしくなりて」、折から訪れていた宮の中將に「ものなど言はせ」ることで、やはり、あの夜の人物が宮の中將でなく男主人公であったと確信する。「なほこの中納言にこそものしたまひけれ」と「見聞き合はせ」たとあることから、まぎれもない真実かどうかをたしかめるため、幾度もくりかえし、男主人公や宮の中將の様子を見たり聞いたりにしていたと考えられる。

ところで、ここに引用した一連の叙述を見てみると、人物たちの声が極めて重要な要素として機能していることに気づく。対の君は「音なくて引き入」ってしまいが、男主人公が自分じしんの「声聞かば、おほえたまひなむ」ことを恐れたためであって、その一瞬にいたるまで、声に対する意識は傾けられたままであった。とりわけて、中村本では、この声に注目する姿勢が顕著に示されている。

対の君、少將など、うちもまどろまず心をくだき、ながめ暮らす折、この中納言殿の、大君の方にて宵の間などものたまふ声、氣配の、ありし夜の夢に違はねば、あさましくて、いかなることぞとあやしく、宮の中將の声と聞き合はせまほしくて、(中略)この中將、常に参りて、宰相の中將につきて参り寄らるるを、例はもてなさねど、さるべき若き人など出だし会はせて、ものなど言はせて聞くに、氣配いとあてに心にくけれど、似るべくもあらざりければ、「なほこの中納言にてこそおはしけれ」と思ひ合はせて、(中略)「わが声聞き給はば、思し合はせて、知り初め給ひなば、男の御心は、今ほとも、よに思し過ごさじ。音聞き今少し苦しかるべき」と思へば、声もせず引き入りつつ、見え奉らず。

(二十九頁―三十頁)^③

現存本と比較してみれば、「ものうちのたまへるけはひなど」とするところが「ものたまふ声、気配」、「式部卿の宮の中將のけはひ」が「宮の中將の声」、さらに「音なくて引き入り」が「声もせず引き入り」など見え、殊更に「声」を浮かびあがらせている様子が見てとれる。

夜の寢覚のひとつの方法として「声」を捉えた論考に、末沢明子氏「聞くことの機能―『夜の寢覚』の「声」―」^④がある。夜の寢覚に「聴覚系の語」が多く、「声」を「聞く」ことを媒介として男主人公と女主人公の關係が表出されていることを明らかにし、夜の寢覚が心中表現の肥大化した物語であることもわかかわらせながら、「聞く」行為がこの物語の選択した方法であることを指摘したものである。具体的に「声」が伴われて描かれる例を見ておけば、

(男主人公ハ)例の中障子のほかに寄りて(女主人公ノ部屋ノ様子ヲ)聞きたまへど、人音もせねば、やをら母屋より通りて聞きたまへば、対の君の声にて、「御格子まゐりて、御殿油などまゐりてよ」と言ふなれば、近く参る人のみざり退きたるほどに、いとよく推く量りて、やをら帳の帷を引きあけて、すべり入りたまふを、

(九十八頁―九十九頁)

というところでは、対の君の発話によって女房たちが戸じまりなどのために退出するであろうことを男主人公が察し、女主人公のもとに入りこんでいるし、他にも、「人は池のわたりなど涼み歩くなるべし、そなたに声などあまたして、(女主人公ノ居ルトコロハ)いと静やかなるに、」(三十頁)のように、女房たちの賑やかな声と対比されながら、女主人公のいる場所の静けさが強調され、男主人公の侵入を招くといった例も見える。夜の寢覚は極めて方法的に「声」を語るものであり、そうであるからこ

そ、対の君が真実を探るため、直接問いかけるのでもなければ、相手の顔を見るのでもなく、声を聞いて判断していることにも、相応の理由があったと考えられてくるのである。異様なまでに「声」に埋め尽くされた、対の君が真実を知ることになるこの叙述は、前掲末沢氏論考においても「対の君が真相に気付く場では、視覚、聴覚を働かせているが、決め手となるのは声である。声によって相手が誰なのかを探るのが特徴的である。」と指摘され、声による気づきに注意が喚起されているところでもあった。^⑤

そもそも、なぜ、声によって、九条で女主人公と契りを交わした相手男主人公であると気づくことができたのであろうか。逢瀬のさい、女主人公のことを但馬守三女と思ひこんでいた男主人公は、「直々しきあたりには我まだきに知られじ。見では片時あるべくもあらぬを、おのづから、我がため、世の音聞き、見苦しくもどきなかるべきさまにてこそ」(三十三頁)と思い、真実を「名のりもしたまはず」(同上)であった。身分意識から名のことを避けようとする男主人公は、愛おしく離れがたい女主人公の前に「宮の中將と思はせて、いとつき混ぜなる言葉」(同上)を語るのである。その直後、立ち去り際に、男主人公は対の君と対面する。

さすがにゆかしければ、対の御方、端近くみざり出でたるに、(男主人公ガ)寄りおはして、(中略)この人にも中將と思はせてのたまふに、(対ノ君)「げに、宮の中將の、妬がりて、一人離れ居たるほどをうかがひて、入り来たるなめり」と心得つるに、

(三十四頁)

男主人公は、対の君に対しても、やはり、宮の中將と思わせる態度をとり、正体を偽っている。^⑥引用した箇所につづいて、和歌の贈答も行っ

ていることから、対の君が男主人公の声を聞いていたこともなるほど納得されよう。しかしながら、対の君が、男主人公の顔を見ることもなく、確信をもって声のみから判断できた理由は、単に声を聞いたことがあるということにかぎられないのではないか。その声のみならず、男主人公が宮の中将であると語った事実とともに、はつきりと心底に記憶されていたと考えたいのである。

前もって聞いていた情報をもとに宮の中将になりきって語ることで、男主人公は女主人公や対の君に宮の中将と認識させており、「名のりもしたまはず」と決めこんで真実を語ろうとしない姿勢を見せていたのであるが、その一方で、対の君が女主人公に真相を明らかにする冒頭に掲げた場面において、対の君は「宮の中将の君とは名のりたまふなりけり。」というのであった。男主人公が自分は宮の中将であると名のりたのだ、とはつきりと語る対の君の姿勢からは、この一件が大きな衝撃であったと感じとることができる。男主人公にとっては女主人公の気を惹こうと宮の中将と偽ってあれこれと語っただけのことが、対の君にとっては「名のりたまふなりけり」と捉えられてしまうほどの事態になってしまったのである。新編日本古典文学全集が「なりけり」は、そのことが今わかった、気付いたら……だった、の気持。」(五十八頁)と注しているが、ようやく気づいた驚きとともに、男主人公の偽りのことばを真実と誤認し、声とともに記憶した対の君の姿も見てとれるように思うのである。同じ箇所を、中村本でも見ておこう。

「いみじく御命も絶えぬべく思したることを、かけても申し出でじと思へども、むげに聞こえ知らせ奉らでやはとて申し侍るなり。かのおはせし人は、この中納言にこそおはしけれ。但馬の守のむすめと思し落として、われとも知られじの御心にて、宮の中将とは名のり

「宮の中将の君とは名のりたまふなりけり」考

給ひけるなり。

(三十一頁)

おおよそ現存本と似たかたちをとるのであるが、「宮の中将とは名のり給ひけるなり。」はほぼ言辭を一致させて描かれている。中村本においても、このことばは対の君の心情を表現するのにもっとも適したものと把握されていたと考えられる。対の君は、男主人公による偽りのことばを「名のり」と捉え、その声とともに深く心に刻みこんでいたことが確認されるのである。

三 「名のり」の解釈

「名のり」とは、はたして、どういった行為であったか。夜の寢覚には「宮の中将とは名のりたまふなりけり。」の一例を含めて、十三の用例を見ることができ^⑦。五巻本によつて巻ごとに分けられてみれば、次のようになる。

卷一	八例
卷二	一例
卷三	〇例
卷四	四例
卷五	〇例

卷一に多いことをひとまず指摘できるが、卷一は、真実を名のろうとしない男主人公と、宮の中将と名のりたという対の君の、「名のり」を媒介としたすれちがいが中心になっている。なお、卷一の八例のうち三例

は、男主人公の子どもを切望する父関白が、男主人公の子と「名のり」出る者がいれば、どのような身分でも、いかなる非難を受けていたとしても構わないと言及するさいに用いられているため、いまはとりあげない^⑧。

すでに見てきたように、男主人公は「名のりもしたまはず」という態度であったが、女主人公との逢瀬を思いだすにつけ、「うち名のりでも、駒の脚とく、ふりはへまほしく」（四十二頁）感じて、真実を名のりでも会いに行きたいとも思っていたようである。しかし、世間体を重んじる男主人公は、女主人公のことを但馬守三女と誤認していたことから、身分の低い女との噂は避けたいと願い、「よくこそは、思ひのままに名のり寄らずなりにける。」（四十六頁）とも思う。名のりべきか、名のりないべきかの違いはあるにせよ、いずれのばあいにおいても、男主人公にとって、真実を告げるかどうかが問題にされていることに注目しておかなければならない。

さて、互いに真相を知ったのち、男主人公は次のように回想している。

我も人も、あいなかりける人違へに、あらぬ名のりを変へつつ、はかなく空にただよひて、互ひにかかる契りの、前の世まで恨めしき
に、「身を知らずは」と、心は思ひなされず。

（七十七頁―七十八頁）

両者ともが人違いをしたことから、宮の中将であるかのように語ったり、あてもなく彷徨っていたりしたことを反芻しながらも、女主人公への想いを捨て去ることはできないという。偽りを述べたことへの反省と見てとれそうであるが、ところが、巻二になると、男主人公はまたもや偽りの名を語って女主人公に接近する。

うへはいとすくよかなる立文にて、「宰相中将のもとより」と名のりせて、（男主人公カラ女主人公ノモトへ）たてまつらせたまへれば、「さこそはあらめ」と思ひて、御前に参らせられたれば、引きあげたまへるに、かかれば、胸つぶれて、「中将のとは見えずこそ」とてうち置きたまへるを、

（二〇四頁）

女主人公じしんからの対応を望むあまり、男主人公は、女主人公の兄である宰相中将と名のりて消息をとどけさせる。女主人公は何の疑いもなく、これを開けて見てしまうのであり、言葉少なく、消息を脇に置かざるをえない女主人公の心中ははかりしれない。男主人公にとって、偽りのことばをもつて名のりたことは非難されるべきことでなく、そこには、女主人公に対する配慮も当然のことながら存在しない。男主人公にとっての「名のり」は、容易に変更が可能であり、それほど重んじられるものでなかったといつてよい。

一方、風情のない立て文ではあったものの、「さにこそはあらめ」とあるように、女主人公が宰相中将からという「名のり」を信じてまったく疑わなかったとする叙述には、対の君が「宮の中將の君とは名のりたまふなりけり。」と切実に語っていたのと同様、女主人公における「名のり」という行為も男主人公のそれとはかけ離れたところにあるように思われる。

巻一、巻二の「名のり」を見たが、次に、巻四の「名のり」四例をとりあげて検討してみたい。これらはいずれも、女主人公の名を語る物の怪にかかわっている。

病に倒れた女一の宮を看護しなければならず、女主人公のところへ訪れることができない男主人公のもとに、「北殿の御生霊、恐しげなる名のり

りするもの」(三八二頁)が現れる。北殿は女主人公の邸を指し、すなわち、女主人公の生霊だと「名のり」する物の怪が女一の宮にとりついて登場したのである。物の怪は、男主人公と女主人公の仲を妨げる女一の宮に対し、「さらに生けたてまつりたるまじ」(三八三頁)と語り、その命を奪おうとする。ところが、男主人公はまったく動じないどころか、「言ふこととて、まねびもてはやすことのなかに、つゆのまことはなきかな」(同上)と一切の真実はないと断じ、「をかしうも見聞きたまふ」(同上)ありさまである。さらに、女主人公が生霊になって祟りを起こすことなどありえないと思う男主人公は、「ものぐるほしき狐などが名のりを、しか続け申し出でむことを、まこととしたまふ、いと不便に、人聞き思ふらむことも、かへりてをがましきことにさぶらふ」(三八五頁)とも述べているのである。

たしかに、男主人公のいうように、物の怪が語る内実は、物語が丹念に語りつづけてきた女主人公の心中とは決定的に異なっている。大皇の宮を中心とする女一の宮側が女主人公を排除しようと画策していたことは知っていようし、疑いをもつことも当然の対応と解されよう^⑨。

それでは、同じく、女一の宮側の思惑を感じていた女主人公は、この事態にどのように対応しているのであろうか。

くはしう人告げ申すに、(女主人公ハ)いとあさましう、胸ふたがりたまひぬ。

「(中略)今となりては、(男主人公ニ)うちとけ頼みきこゆべきものとは思ひだに寄らぬことにて、まことに、いみじうつらからむ節にも、身をこそ恨みめ、人をつらしと思ひあくがる魂は、心のほかの心といふとも、あべいことにもあらぬものを。」

(三八八頁―三八九頁)

「宮の中將の君とは名のりたまふなりけり」考

生霊の噂を告げられ、驚く女主人公であるが、「心のほかの心」であったとしてもありえることではないと考えている。あるはずがないと思いつながらも、しかし、つづけて語られる心中を見ると、「つきづきしう名のり言ふらむ」(三八九頁)物の怪に対して、男主人公がそれを信じ、「げに、さりげなくて、さもやあらむな。疎まし」(同上)と感じたとも思っている様子が見いだされる。

前述したとおり、実際のところ、男主人公はこの物の怪が偽の生霊であり、女主人公とはかわらないと判断しているのであるが、それにもかかわらず、男主人公は生霊出現が自分じしんのせいであると信じているのだと苦悩する女主人公の姿は、右に引用した一節のほかにも、いたるところにあらわれている。男主人公を前にして、我が身のつらさに涙がこぼれたことに対し、「げに、これ恨むる気色ならむ」(三九二頁)と、生霊を生みだし嫉妬に狂う女の流す涙なのかと感じるのであろうと思つているし、生霊の噂を信じていないのであれば、笑ったり、あきれたりしてもよいのに、そうはしない態度に、「げにとおほしけるなめり」(三九三頁)とも考えている。くりかえし「げに」と表現され、女主人公じしんが生霊になったと納得してしまっているのだと思うのである。あるいは、男主人公から送られた消息に返事をしようとしては、「まことに深き恨みに、かかればこそ」(三九七頁)と思われるのではないかと考えるし、石山の姫君を男主人公母尼上のもとに連れ戻すといいだせずに口ごもる男主人公を見ては、「さればよ。一夜も、さばかり現はれ出でてののしる気色を、『さこそありしか』と、あらぬこととおほさば、のたまはざらましやは。深くまこととおぼすなめり。」(三九九頁)と、男主人公の語ろうとする内実とはまったく異なり、女主人公の生霊の噂を真実だと思つていようための行動であると信じて疑わないのである^⑩。

どうして、女主人公は、男主人公が生霊出現を事実でないと判断して

いると信じていることができなかつたのか。こうした反応を示さざるをえない要因には、物の怪自らが女主人公であると「名のり」を行ったことに関与しているはずである。「名のり」をする生霊であつたからこそ、無頓着に否定することを許さない女主人公の意識が汲みとれるように思われる。

女主人公が「名のり」を過敏に意識したと考える所以は、夜の寢覚の始発、天人降下事件にかかわっている。女主人公は一度目の天人降下のち、翌年の訪れを「人知れず教へし月日を数へて待」(十九頁) だったのであり、さらにその翌年、三年目に天人が訪れなかつたことに対しては「天の原雲のかよひ路とちてけり月の都のひとも問ひ来ず」と詠じていた。『古今和歌集』の「あまつかぜ雲のかよひぢ吹きとぢよをとめすがたしばしとどめむ」(巻第十七・雑歌上・八七二)^⑩をふまえた表現とされるが、古今歌は天人の姿をとどめたいと詠っているのに対し、女主人公の詠歌において、天人はもはや不在である。「おのが琵琶の音弾き伝ふべき人、天の下には君一人なむものしたまひける。」(十七頁―十八頁)と天人に語りかけられ、唯一の選ばれた存在であると思はれながらも、遂に見放された悲痛な告白でもある。三年目の天人不降下は、女主人公に「自己の不確実な存在を知つた不安」をかきたたせ、その存在を「中途半端に迷う少女」^⑪として位置づける。自分じしんとはいかなる存在であるかを考えるうえで、ただならぬ危うさを喚起させる事件は、自らの存在を宣言する「名のり」という行為に対するあこがれにも似た感覚を女主人公に生じさせたといえることができるのである。

巻一、巻二、そして、巻四と見てきたように、女主人公側には、偽つて名のりすることを公然のものとしないう姿が看取される。対の君が「宮の中將の君とは名のりたまふなりけり。」と強烈に語つたのはなぜか。「名のり」をする生霊の噂に対し、女主人公は、それはありえないことと自分

じしんの心を否定しようとしながらも、男主人公は必ず信じているに違いないと思わざるをえなかつた要因はどこにあるか。対の君や女主人公にとつて、「名のり」とは、信憑性を持ち、肝要なことであつたと捉えなければならぬように思うのである。どのように「名のり」を捉えているかといった問題が表出しており、対の君、女主人公と、男主人公とのあいだは決定的に隔てられている。

四 結びにかえて

女主人公、および、対の君と男主人公の中で、名のりることがどのような受けとめられ、また、互いに異なっていたかを述べてきた。そこには、女主人公側と男主人公との「名のり」という行為に対する理解の致命的な乖離が存していたといわなければならない。大倉比呂志氏「『夜の寢覚』論―〈ズレ〉の意味性」^⑫は、天人不降下によって「異化された〈かぐや姫〉の様相を帯びて語られ」ることが、男主人公や帝といった現実と同化しえない女主人公のありように結ばれていくと述べた。本稿においては、その深奥に、天人不降下をきっかけとする女主人公の自己認識の揺れを見いだしておきたいと思う。そして、その自らに対する不安は、女主人公の異質なまでの「名のり」に対するこだわりを生じさせ、女主人公と男主人公の交わることのない「夜の寢覚」の物語を描き出している^⑬のである。

最後に、夜の寢覚と同じように、「名のり」を軸に据えるいくつかの物語を展望しておきたい。「名のり」が物語をおしすすめる重要な要素になつているものとして、源氏物語をまずはとりあげる。夜の寢覚における引用が夙に指摘されている夕顔の物語である^⑭。

道すがら、夕顔を知つた源氏は、この女を詮索しないまま、「我も名の

りをしたまは」(二三五頁^⑤)ないで通っていたが、夕顔の心中を思い、遂に正体を明かす。それに応じて、夕顔にも名のるように求めている。

(源氏)「尽きせず隔てたまへるつらさに、あらはさじと思ひつるものを。今だに名のりしたまへ。いとむくつけし」と、のたまへど、(夕顔)「海人の子なれば」とて、さすがにうちとけぬさま、いとあいだれたり。

(二三六頁)

源氏が「名のりしたまへ」と求めたものの、夕顔は『新古今和歌集』にも所収される「白波のよするなぎさによをつくす海人のこなればやどもさだめず」(巻第十八・雑歌下・一七〇三)を引いて、身分違いを理由に名のりを拒絶する。この直後、夕顔は物の怪にとり殺されてしまうのであるが、しかし、その瞬間まで、両者は名のらないことによつて身分から解放された恋愛に身をおくことができている。「名のり」を行わないという選択が一因となり、物語の進行していくありかたが見いだされる。

夜の寢覚と同一作者に目される散逸物語の朝倉も、『拾遺百番歌合』五十四番右に、

見初め給へりしころ、我が心ながらうつし心もなきほどに、人のそしらむこともたどるまじうおほゆるを、おほつかなきなむ
心憂き、なほ名乗りせよとのたまひければ 朝倉の女君

名乗るとも木の丸殿の雲居なる朝倉まではたれか尋ねむ^⑥

とあることから、名のりを求める男君と名のりをしてしない女君との恋愛譚であることが予感される。朝倉を名のりすることを主題にした物語とし

「宮の中將の君とは名のりたまふなりけり」考

て読み解く辛島正雄氏^⑦は、この物語を源氏物語夕顔巻と比較し、「同じく女の「名のり」を男に求めさせながら、「海人の子」ではなく「朝倉」をもって女に承けさせたところに、夕顔とはまた違うヒロイン像への志向が見て取れるのではあるまいか」と説く。加えて、夜の寢覚を組上に載せ、それとは対照的に、中の品で自意識の強い女を主人公とする朝倉と比べて、「名のり」の欠如による意志疎通の不十分さゆえ、いたずらに悲恋の様相を深めてゆくのは、同工異曲というべきである。(中略)つまり、女の身の上の違いがそれぞれの物語世界の色合いを規定しつつ、対照的な趣を見せているようなのだが、そのじつ、「名のり」をしないことで男と女がすれ違い、それが劇的展開の鍵を握っている点で、きわめて近似した手法による物語だ」と推定し、朝倉は夜の寢覚の「雛形的性格をもつ作品」とも述べている。もちろん、夜の寢覚と朝倉は非常によく似ているのであるが、叙述してきたことをふまえるのであれば、夜の寢覚の男主人公は決して名のらないのではない。真実でなく偽りではあれ、たしかに名のっているのである。この点において、名のらないことを主軸とする朝倉は、夜の寢覚よりも、源氏物語夕顔巻に近似する。

夜の寢覚は、身分違いから名のらない源氏物語夕顔巻や朝倉とは異なつて、偽りを名のりすることで、新たな名のりの物語として物語史上に位置づけられる。引用の方法として捉えなおせば、源氏物語夕顔巻における名のらないありかたを、朝倉が「海人の子」から「朝倉」に据えなおしたのに対し、夜の寢覚は偽りを名のりというかたちに変容させたのである。そして、その名のりという行為は、生霊出現事件に見られたように、夕顔巻引用を伴つて構成される但馬守三女との人違いの一件にとどまらず、夜の寢覚全体にわたる方法として生きているのである。

他にも、源氏物語夕顔巻をふまえる狭衣物語の飛鳥井女君をめぐる物語には、「海人の子」が引用されるし、別当の少將と偽ろうとする狭衣

と、それをするどく見抜く飛鳥井女君の姿も見える。儀式や芸能、偽書、あるいは、軍記物語といった周辺文芸における「名のり」とのかかわりも考えていかなければなるまいが、源氏物語夕顔巻から朝倉、そして、夜の寢覚と、名のる、名のらない物語は継承され、更新されていったことをひとまずは捉えておきたい。

注

- ① 新編日本古典文学全集28『夜の寢覚』（小学館、一九九六年）に依り、文中の（ ）は私に補う。文末の（ ）内には頁数を示す。以下同じ。
- ② 新編日本古典文学全集は「御けはひ」とするが、前田家本、島原本、その他のいずれの諸本にも「けはひ」とある。校訂の意図するところも理解されるが、諸本に従って私に改める。
- ③ 中世王朝物語全集19『夜寢覚物語』（笠間書院、二〇〇九年）に依り、文中の（ ）は私に補う。文末の（ ）内には頁数を示す。以下同じ。
- ④ 「中古文学」（五十九、一九九七年五月）。なお、源氏物語や狭衣物語を対置させたばあいの夜の寢覚の「声」は、多くの問題をはらむように思われるが、本稿の趣旨と異なるため、いまは措く。源氏物語の「声」に関する三田村雅子氏『源氏物語 感覚の論理』I五「音」を聞く人々―宇治十帖の方法―（有精堂出版、一九九六年）初出・物語研究会編『物語研究―特集・語りそして引用』新時代社、一九八六年）、狭衣物語の「声」に関する鈴木泰恵氏『狭衣物語／批評』I第4章「声」と王権―狭衣帝の条理―（翰林書房、二〇〇七年）初出・「狭衣物語と（声）―王権への視線をめぐって―」（『日本文学』四十四―五、一九九五年五月）ほか参照。
- ⑤ 声を聞くことよって判断しようとする要因のひとつに、対の君じしんの性質を挙げることができる。対の君には、利己的な側面もかいま見えるのであり、九条の一夜に訪れた人物と直接対面することよって自らが問い詰められる事態を避けたとも考えられる。対の君の女主人公に猷身的に尽くす姿とは別に、我が身を思う姿も見えることについては、野口元大氏『夜の寢覚 研究』II第一章二「宿世の発頭」（笠間書院、一九九〇年）や星山健氏『王朝物語史論―引用の『源氏物語』―』第II部第一編第一章

「夜の寢覚」第一部の再評価―物語展開と作中人物の心理的必然性―（笠間書院、二〇〇八年）初出・「文芸研究」一五五、二〇〇三年三月）に言及がある。

⑥ 高橋由記氏「撰関家嫡子の結婚と『夜の寢覚』の男君―但馬守三女への対応に関連して―」（『国語国文』七十三―九、二〇〇四年九月）は、物語と史実のかかわりを考証し、「男君が但馬守女との結婚をあくまでも避けたのは、源太政大臣家の大君との結婚が決まっていたこともあるが、撰関家嫡子にとっては当然の決断だったといえよう。」と述べる。物語の基盤ともなる史実はふまえておきたいが、描かれた男主人公の行動に焦点をあわせておく。

⑦ 他の物語における「名のり」の用例を見てみると、源氏物語に二十八例（『源氏物語語彙用例総索引』勉誠出版、一九九四年）、浜松中納言物語に二例（『浜松中納言物語総索引』武蔵野書院、一九六四年）、狭衣物語に五例（『狭衣物語語彙索引』内閣文庫蔵本』岩波書店、一九七五年）となっている。なお、対の君が九条で男主人公に事の始終を語る場面、「なくなりし心」（八十九頁）とある現存本の本文に「名のり」を含む脱文が疑われている。新編日本古典文学全集が中村本に「名のり」を含まずなりにし事」とあることに注目するところであるが、このばあいであっても、男主人公の心内語に、真実を名のっていないと見えることになり、後述する論旨と相違しない。

⑧ 具体的に示せば、「中納言子と名のり来る者あらば」（六十三頁）、「この人の子とだに名のり出づる人あらば」（七十九頁）、「中納言子と名のり出づるがあるまじき」（九十六頁）となる。

⑨ 関根慶子氏「『寢覚』の生霊をめぐって―偽生霊とその位相―」（『平安文学研究』二十九、一九六二年十一月）は、生霊出現がまったくの偽の生霊で、女一の宮側の陥穽であったことを明らかにする。

⑩ 女主人公が自らの生霊を認めているか否か、また、認めているとしてもいつの段階からであるかについては議論が分かれる。「心のほかの心」と嘆いたときにそれを認めたと説く野口元大氏『夜の寢覚 研究』II第三章二「生霊事件の心理的素地」、同II第三章三「生霊事件―自恃の崩壊―」（注⑤）では、同様の見解を述べた野口氏の旧稿への批判に対する回答も

示されている。また、これを含めた諸注釈の多くが「心のほかの心」を無意識の心と解し、女主人公が生霊化を信じていると見なしつつ、その深層心理を明らかにしようとする読みに再検討を加える東俊也氏「寢覚の上の心―心のほかの心」をめぐって―」（『国語と国文学』八十一―二〇〇四年一月）は、「寢覚の上は、自身の生霊化には悩まされていない。自分の心には確固たる信念をもちつつも、周囲の迷惑に、そして何よりも内大臣との関係に押し潰されそうになっているのである。」と述べる。東氏の論考は、物語に語られない「無意識」や「深層心理」の考究を見なおそうと試みるものであつて首肯すべきところが多い。いずれの見解も示唆に富み、私の結論は留保せざるをえないが、女主人公の生霊という噂を否定する男主人公と、男主人公の心中に思い悩まざるをえない女主人公の差異は指摘しておきたい。その点において、生霊事件の、女主人公のみならず、男主人公に与えた影響を問う横溝博氏「『寢覚物語』生霊事件の一面―男君自身の問題として―」（『平安朝文学研究』復刊六、一九九七年十二月）も参照されよう。

- ⑪ 和歌の引用は『新編国歌大観』に依る。以下同じ。
- ⑫ 永井和子氏『続寢覚物語の研究』第一章八「夜の寢覚―無力な人間―」（笠間書院、一九九〇年、一七四頁・一七九頁初出・『国文学 解釈と鑑賞』五十二―一、一九八七年十一月）に依る。これは天人降下事件のみをとりあげたものであるが、同氏「夜の寢覚の悲恋―女主人公は何を恋うたか」（久保朝孝氏編『悲恋の古典文学』世界思想社、一九九七年）は、さらにいくらかの例を挙げ、「以後物語は曲折あるものの、この自己への懷疑という姿勢は基本的には変わらない。」と述べる。
- ⑬ 平安文学論究会編『講座平安文学論究 第十八輯』（風間書房、二〇〇四年）
- ⑭ 対の君の「名のり」意識の原初は確認できないが、「宮の中将の君とは名のりたまふなりけり。」という叙述が女主人公への語りであったことには注目されるし、対の君が女主人公に寄り添って活躍していたことも思い

起こされよう。ただ、対の君が単に女主人公の分身でないことは注⑤に詳しい。野口氏、星山氏のほか、三田村雅子氏「寢覚物語の（我）―思いやりの視線について―」（物語研究会編『物語研究第二集―特集・視線』新時代社、一九八八年）や長南有子氏「『夜の寢覚』の女君たち―沈黙の意味するもの―」（『緑岡詞林』二十三、一九九九年三月）など、対の君の人物論は充実している。

⑮ 夜の寢覚における源氏物語夕顔巻引用は、鈴木弘道氏『寢覚物語の基礎的研究』第三章第一節二（『源氏物語帯木・空蟬・夕顔諸巻と寢覚物語』（塙書房、一九六五年）をはじめとする多くの研究がそなわり、それらを追考する赤迫照子氏「『夜の寢覚』における夕顔物語引用の方法―「身分違いの恋」という装い―」（和田律子氏・久下裕利氏編『更級日記の新研究―孝標女の世界を考える』新典社、二〇〇四年）がある。

⑯ 日本古典文学全集12『源氏物語二』（小学館、一九七〇年）に依り、文中の（ ）は私に補う。文末の（ ）内には頁数を示す。以下同じ。

⑰ 樋口芳麻呂氏『王朝物語秀歌選（上）』（岩波書店、一九八七年、一四八頁）に依る。

⑱ 「名のりをしつつかぬ」女君の物語―『朝倉』物語管見―」（王朝物語研究会編『論集源氏物語とその前後3』新典社、一九九二年）

⑲ 井上眞弓氏『狭衣物語の語りと引用』I第四章「夢のわたりの浮橋―論」（笠間書院、二〇〇五年）は、源氏物語夕顔巻を翻案しつつ、狭衣の一方的な「海人の子」という評価によって飛鳥井女君が規定されていくありかたを明らかにする。

⑳ 中世文芸における「名のり」については、小峯和明氏『説話の言説―中世の表現と歴史叙述』第9章「名のる語り手―説話の語り」（森話社、二〇〇二年 初出・説話の講座2『説話の言説 口承・書承・媒体』勉誠社、一九九一年）ほか参照。

（本学非常勤講師／日本学術振興会特別研究員）